

2グループと他に数頭の個体が生息している。我々はT・P₁・P₂・N_a・D₂の全個体を識別し、S・Hの個体の一部を識別している。この観察基盤の上に上記の研究がなされたが、本報告ではT群のサブグループ現象とそれに関連するメスの離脱について記す²⁾。

a. T群のサブグループ

交尾期に形成されるサブグループは2~3カ月に及ぶ場合があり、メンバーの安定性がみられるが、非交尾期のサブグループはせいぜい数日間継続されるだけであり、メンバーの交代がみられた。又、交尾期のサブグループのメンバーの一部はそのグループが解消された後、不明になる個体や、主群に戻った後の非交尾期のサブグループ現象下で離脱し、他群へ加入する例があった。又、周年を通じて餌場に出席したサブグループのサイズを1, 2~5, 6~10, ……26~30, 31~40, ……71~80, 81以上に分けた場合、性・年齢によって、各サイズ別グループへの参加回数の相異がみられた。若年においては31以上の大きなサイズへの参加回数が多いが、5, 6才になると明確な性差及び個体差がみられた。離脱直前のオスや、他群から加入したばかりのオスの場合は、2~10の小さなサイズのグループへの参加回数が多くなる。しかし、メスの場合は大きいサイズのグループへの参加回数が多いが、数頭の特定個体だけは、小さなサイズのグループへの参加が多かった。又、絶えずメンバー交代をおこなっているサブグループ現象下で、絶えず安定したメンバーシップを形成しているオトナメスとオトナオスの例があった。

b. オトナメスの離脱

'74年にT群から離脱したメス1頭と'75年にT群から離脱したメス1頭と出身不明のメス1頭とオス4頭(1頭の老オスは3日前にはS群にいた)よりなるグループ(N_a)を'76年1月に発見した。又、'75年にT群から離脱したメス2頭は'76年にP₂群へ加入したが、非交尾期になると不明になった。現在、この2頭のうち1頭は、76年前半より継続しているT群離脱メス2頭のグループ(D₂)に加わっている。他の1頭はP₂群のオスであった個体と一緒にいたのを'77年3月に確認した。メスの離脱はT群の個体ばかりでなかった。P₂群の2頭が'76年に不明になった。P₁, P₂を往来していたメス

が'77年2月にN_aグループで発見された。

ヤクザル [*Macaca fuscata yakui*] の垂直分布に関する生態学的研究

丸橋 珠樹 (京大・霊長研)

亜熱帯林要素の混入する暖温帯林から冷温帯林までの大きい環境傾度のある屋久島に分布するヤクザルの多様な環境条件への適応形態を、群れ生活の具体的把握を通じて明らかにすることを目的とした。

連続して垂直分布する群れ間の比較基準設定のため、最も低地の暖温帯林に生活する一群の集中的な調査を主に行なった。この群れ(工事場群)は、1974年以来総合調査が実施されてきた国割岳西斜面地域のほぼ中央に分布する。人づけが進んだ1976年8月から12月までの5ヶ月間では、スキヤニング法を用いて群れの活動を分析した。

1976年8月にはこの群れの構成はadult male 3, young adult male 9, adult female 18, juvenile 11, baby 6 合計47頭であった。12月までに、0才児は3頭死亡し、young adult maleに数頭の移出入があった。

遊動域は、海岸付近から高度450mまでにわたる約80haであり、季節ごとの土地利用に変化がみられた。1975年のそれとは若干の年変化がみられ、この2年間の遊動域は約1km²であった。この群れの遊動域の南、北両端で他の群れも利用した重複部分が約12haあった。群れ間の出会いも観察された。

約80種の植物性食物が記録された。1976年8月から12月までの五ヶ月間については、採食行動の詳細な量的分析を行ない、季節変化や食物選択の傾向性について検討した。

従来、ヤクザルは“サブグループ”を起すといわれてきたが、分節化した集りの構成をおさえることができた26例の分析によって、その実態がある程度明らかとなった。この現象は、高頻度にもみられ、非交尾期と交尾期とでは明瞭な、分節化の形態の相違がある。

6794頭のアクティビティが、15分間隔のスキヤニングによって記録された。アクティビティは6つに分類され、それぞれ、Inactive 23%, Moving 21%, Feeding 18%, Grooming 33%, Self-grooming 1% Others 5% であった。

高地のヤクザルの分布については、数回の調査によって若干の記録が得られた。

房総丘陵におけるニホンザルのフン分析

高杉 欣一 (東大・農)

渡辺 隆一 (都立大・理)

小金沢正昭 (農工大・農)

房総丘陵におけるニホンザルのフン分析は、従来より

- 1) K群については今まで聞き込みによる資料しかなかった。'77年3月下旬に3泊4日、調査人数9名で実地踏査がなされたが、痕跡すら発見できなかった。このため、再調査を行う予定である。
- 2) この一部は、第21回プリマテス研究会(1975. 3. 13, 於犬山)で「餌場で観察されたグループサイズの月別変化について」という題目で発表した。共同発表者: 赤堀克正, Burton, J. J., 松村正敏, 鈴木 健

単なる食性解析のためというより、地域的自然におけるニホンザルの生態学的位置づけを究極的な目標として調査を行ってきた(研究成果1参照)。しかし、本年度は天然記念物の主眼である高宕山T-I群の餌付けが、1976年3月末をもって突然中止されたため、高宕山地区の調査は、この群れの餌付け中止後の経過に精力を集中せざるをえなくなり、また餌場でなければできないフン分析の基礎となる特殊な調査は全て不可能となった。

フン採集カード(参考資料)の完成によって、採集時の記載が統一的におこなえるようになり、フンの採集・分析は昨年度の課題に続継しておこなわれ、特に月毎の

採集数が不十分な期間、地区について集中的におこなったが、すでに示した結果が追認されたのみで大きな変化はなかった。未同定の微細片の量が大きいため、目下その分析をおこなっている。

フン内容物同定用の植物標本(とくに種子)は著しく増加し、これまで未同定であった多くの種子の識別が可能となった。1976年12月現在、フンより検出された種子(55種)のうち76%(42種)が識別された。

研究成果

1. 小金沢正昭(1975):フンからニホンザルの食物を調べる方法。モンキー(145・146), 32-39.

フン採集カード

モノクロ ネガカラー スライド
 フン虫標本

No. -

採集地域 _____
 採集者名 _____
 個体名 _____ ♂ ♀ (推定) _____ 才
 動物名 _____
 行動 _____
 産状(地点, 新鮮度など) _____

個組 Nos. - ~ -

色(表) _____ (裏) _____ (中) _____
 表面の様子 _____
 形 _____
 長さ . cm 径 . cm 厚さ . cm
 臭い _____ 附着物 _____
 フン虫 _____
 生重(風袋こみ) . gr. 風袋 . gr 容量 . cc.

